

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：64303

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00672

研究課題名(和文) ムンダ諸語における危機言語のドキュメンテーション

研究課題名(英文) Documentation of endangered languages in Munda

研究代表者

長田 俊樹 (Osada, Toshiki)

総合地球環境学研究所・研究部・名誉教授

研究者番号：50260055

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はインドのジャールカンド州における消滅の危機に瀕した言語(以下危機言語)のうち、ムンダ語族に属するアスル語、ビルホル語、コルワ語のドキュメンテーションを目指したものである。アスル語については、海外共同研究者であるグンジャル・イキル・ムンダがアスル民話の採集を行い、コルワ語については研究分担者の小林正人がコルワ語民話を含むコルワ語文法をある程度完成させた。ビルホル語について、研究代表者の長田が二度にわたってフィールド調査を行ったが、かなりの方言差があり、まだまだ記述途上である。今後の調査に期待したい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

危機言語の研究は世界的にみて、緊急を要するテーマである。一度消滅してしまった言語を復元させることは不可能に近い。その消滅の言語が持っているデータが将来人類に明るい未来を輝かせる可能性があることは、多くの研究者が指摘するところである。

ムンダ諸語の危機言語については、全く誰も行ってこなかった領域であり、われわれがドキュメンテーションを行うことは非常に大きな意味を持っている。また、本研究では危機言語のドキュメンテーションを行うとともに、現地の研究者を育てることを目指したが、ある程度、成果をあげることができたと自負している。今後も現地研究者の育成に取り組んでいきたい。

研究成果の概要(英文)：In this project we have a goal to make a documentation for the endangered languages spoken in Jharkhand, India and belonging to Munda language family. Our target languages are Asur, Birhor and Korwa. As for Asur, our collaborator, Gunjal Ikir Munda had collected a Asur folktale. It is the first time to make a documentation for Asur. As far as Korwa is concerned, Masato Kobayashi has done a field research and collected a folktale. He has almost finished writing a grammar of Korwa. We have a plan to publish it near future. It is very hard to collect data on Birhor language. I have carried a field work on Birhor. In result it is a dialect difference among Birhors. So I can't collect good data. We have to collect the data on Birhor in the next project.

研究分野：言語学

キーワード：危機言語 ムンダ語族 アスル語 ビルホル語 コルワ語 ジャールカンド州

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、生物多様性に対する関心が高まると同時に、言語多様性に対する関心も高まり、消滅の危機に瀕した言語である危機言語の調査が重要であることが訴えられるようになった。ニコラス・エヴァンズ教授(オーストラリア国立大学)による『Dying Words』は、危機言語の状況と危機言語が消滅することによって引き起こされる問題について実例を挙げながら、具体的かつ包括的に論じたものである。この書籍は、本研究代表者である長田らによって日本語に翻訳され、『危機言語』として京都大学学術出版会から出版された。危機言語が消滅することで、言語によって継承されている文化も消滅してしまうことが、この本によって明らかにされた。つまり、言語多様性を失うことは文化にとっても重要であることが再確認された。

こうした状況の中、各地で危機言語のドキュメンテーションが行われることとなり、われわれインド研究者もインドにおける危機言語について、研究の重要性を認識するに至った。

2. 研究の目的

本研究はムンダ語族ケルワル語派における危機言語の記録保存をおこない、危機言語の継承のために、母語話者研究者の育成もあわせておこなう。

インドにはインド・アーリア語族、ドラヴィダ語族、ムンダ語族、チベット・ビルマ語族の4語族が混在し、世界的にみて、言語多様性がもっとも高い地域の一つである。そのうち、あまり記述が進んでいない危機言語が多いのがムンダ語族(諸語)である。

本研究が対象とする言語はムンダ語族ケルワル語派に属するコルワ語、アスル語、ビルホル語の3言語である。2001年の国勢調査によると、話者人口はコルワ語が28,286名、アスル語が7,783名、ビルホル語は5,950名と、いずれも話者人口が三万人以下の危機言語である。代表者はビルホル語の調査経験があり、ビルホル語とアスル語の調査を主に担当し、分担者の小林はすでにコルワ語の調査経験があり、コルワ語を担当する。

本研究の学術的独創性は、危機言語のドキュメンテーションを、同じケルワル諸語の母語話者研究者とともにおこなう点にある。ムンダ語を母語とするピクラム・ジョラとサンタル語を母語とするガネーシュ・ムルムの二人は、アメリカにある危機言語研究を専門とする Living Tongue Institute の南アジアのコーディネーターを務めている。また、ムンダ人であるグンジャル・イキル・ムンダはジャールカンド中央大学で危機言語を担当しており、彼らとともに、これら危機言語のドキュメンテーションをめざす。少数言語のコミュニティにおいては、教育を受けた人々ほど母語を棄てて、家庭での言語をヒンディー語などに切り替える傾向にある。したがって、母語話者が母語を研究すること自体があまりおこなわれていない。そんな状況のなかで、母語話者研究者とともに、危機言語のドキュメンテーションをおこなうことは、危機言語の継承を考える上で、非常に重要であると考えられる。

3. 研究の方法

ムンダ語族ケルワル語派のうち、話者人口が少なく、危機の程度が比較的高い、コルワ語、アスル語、ビルホル語を対象とする。これら三言語について、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が作成した語彙調査票を使用して、まず語彙調査をおこなう。代表者の長田と分担者の小林、研究協力者のガネーシュ・ムルムの三名は話者人口の多いケルワル諸語であるサンタル語、ムンダ語、ホー語の三言語の語彙調査をおこなったことがあり(その成果は Kobayashi, Murmu and Osada 2003)、その際使用した調査票を使用する。また、語彙調査と並

行して、日常会話を音声テープレコーダーやビデオ録画などのデジタル機器による記録をおこなう。小林がこれまでのコルワ語調査でおこなったように、民話を採集することも重要である。なお、こうしたドキュメンテーションによって、デジタル媒体で記録されたものはオーストラリア国立大学などが運営している PARADISEC (危機言語のためのデジタルアルカイブ) に登録して、将来の研究者が使用できる形で、保存する予定である。

4. 研究成果

(1)2018年度の研究について、4月から5月かけてのゴールデンウィークを利用して、本科研による調査打ち合わせのため、長田がインド工科大学ガンディーナガル校とランチャー大学に出張し、今後の研究調査の日程などを話し合った。8月に、アスル語の調査を行い、2月にはビルホル語調査を行った。また、フィールド調査以外では、マイソールにあるインド中央言語研究所に行き、危機言語調査の現状を副所長などと話し合った。12月には、そのインド中央言語研究所で開催された、インド言語学会に参加し、成果報告として学会発表をおこなった。一方、研究分担者の小林は2月から3月にかけて、コルワ語のフィールド調査をおこなった。コルワ語の基礎語彙調査とコルワ語の民話採取をおこなった。

(2)2019年度についていえば、10月にビルホル語調査と12月にアスル語の調査を行った。重要な成果報告としては、8月に、タイのチェンマイで行われた国際オーストロアジア言語学会で、長田と小林の連名で「Grouping of the three Kherwarian Munda languages」を発表したが、これはアスル語、ビルホル語、コルワ語の調査結果を織り込んだ発表であった。

(3)2020年度および2021年度は、インドへの渡航ができなかったし、国際会議の発表も行えなかった。したがって、2022年度への延長を申請し認められた。

(4)2022年度9月になって、インドへの渡航ができるようになったため、研究代表者の長田は、2022年10月から1か月、また2023年2月から1か月、海外共同研究者がいるフィールド調査の拠点となるランチャー大学へ行くことができた。ただし、アスル語やビルホル語の話されている地域でのフィールド調査については、代表者の所属する総合地球環境学研究所の内部規定により、現地に赴くことができなかった。そこで、現地の海外共同研究者であるピクラム・ジョラ博士からビルホル語調査の概要を聞き、グンジャル・ムンダ氏からアスル語の調査概要を現地で発表してもらった。本研究の成果として、危機言語である対象言語について、ビルホル語については、語彙調査リストを完成させ、アスル語については、アスル語によるテキストと辞書の草稿を作ることができた。

また、対象言語であるコルワ語については、研究分担者の小林が担当したが、ある程度の文法書の草稿をまとめあげ、これから公刊に向けて出版社との交渉をおこなっている。

さらに、本研究では現地のムンダ語を教えている若手の研究者への教育プログラムを2023年3月に1週間おこなうことができた。これまでムンダ語の教科書がしっかりしたものがない状況で、至急、新しい教科書の執筆し出版することが重要であるという認識で一致した。そのため、研究代表者らが東京での言語研修用に作った教科書の英語版 A Course in Mundari をヒンディー語出版すべく、鋭意努力中である。本研究によって、若手の研究者との交流を実現し、今後の研究の足掛かりをつくることができたと自負している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 11件 / うちオープンアクセス 4件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Nathan Badenoch, Toshiki Osada, Madhu Purti and Masayuki Onishi | 4. 巻 82(1-2) |
| 2. 論文標題 Expressive Lexicography: Creating a Dictionary of Expressives in the South Asian Linguistic Area | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Indian Linguistics | 6. 最初と最後の頁 25-40 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 Masato Kobayashi | 4. 巻 51(1) |
| 2. 論文標題 Origin of the -k past in Kurux and Malto | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 International Journal of Dravidian Linguistics | 6. 最初と最後の頁 1-25 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 Masato Kobayashi | 4. 巻 81(3-4) |
| 2. 論文標題 Reconstruction of verb suffixes in Kurux and Malto | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Indian Linguistics | 6. 最初と最後の頁 1-12 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 長田 俊樹 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 「再構」再考：日本語学史の一断面 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 国立国語研究所論集 = NINJAL Research Papers | 6. 最初と最後の頁 41-64 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00003436 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 該当する |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Masato Kobayashi | 4. 巻 140 |
| 2. 論文標題 Viewing Proto-Dravidian from the Northeast | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Journal of the American Oriental Society | 6. 最初と最後の頁 467-482 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7817/jameroriesoci.140.2.0467 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Masato Kobayashi | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 Panini's definition of the bahuvrihi as sesa 'remainder' | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Indian linguistic studies in honor of George Cardona | 6. 最初と最後の頁 217-233 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Osada Toshiki, Madhu Purti and Nathan Badenoch | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 Expanding the Model of Reduplication in Mundari expressives | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Expressives in the South Asian Linguistic Area | 6. 最初と最後の頁 78-99 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 長田 俊樹 | 4. 巻 64 |
| 2. 論文標題 <研究論文>石濱シュールに集う人々 : 四半世紀後に | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 日本研究 = NIHON KENKYU | 6. 最初と最後の頁 123-158 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15055/00007812 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|---|-------------------|
| 1. 著者名 Osada Toshiki | 4. 巻 3 |
| 2. 論文標題 Farewell to Kirikae Hideo | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 International Journal of Eurasian Linguistics | 6. 最初と最後の頁 1-6 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/25898833-12340047 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|--|------------------------|
| 1. 著者名 Nathan Badenoch, Nishant Choksi, Toshiki Osada, and Madhu Purti | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 Performance in Elicitation: Methodological Considerations in the Study of Mundari Expressives | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Advances in Munda Linguistics | 6. 最初と最後の頁 131-141. |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 長田俊樹 | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 日本語学序説 - 日本語の起源はどのように論じられてきたのか | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 日本語「起源」論の歴史と展望 | 6. 最初と最後の頁 315-334 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 小林正人 | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 クルフ語 Expressive に見られるムンダ語からの影響 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 ムンダ語擬音語擬態語辞典 | 6. 最初と最後の頁 28-32 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 小林正人 | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 Adnominal locatives in Classical Armenian and typological harmony. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Catt, Adam, Ronald I. Kim and Brent Vine (eds.), QAZZU warrai: Anatolian and Indo-European Studies in Honor of Kazuhiko Yoshida | 6. 最初と最後の頁 177-191 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 4件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 Masato Kobayashi |
| 2. 発表標題 Dravidian and the Kurux-Malto -k Past: What outlier languages tell us about reconstruction |
| 3. 学会等名 43rd International Conference of Linguistic Society of India (招待講演) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 長田俊樹 |
| 2. 発表標題 Grouping of the three minor Kherwarian Munda languages |
| 3. 学会等名 国際オーストロアジア言語学会 (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 長田俊樹 |
| 2. 発表標題 Expressives in Mundari |
| 3. 学会等名 An international conference on affect, embodiment and ecology: multi-disciplinary Perspectives (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 小林正人 |
| 2. 発表標題 ドラヴィダ語族クルフ語・マルト語の不定詞の史的再建 |
| 3. 学会等名 日本言語学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 長田俊樹 |
| 2. 発表標題 インダスプロジェクトを振り返って |
| 3. 学会等名 東京外国語大学AA研フィールドサイエンス研究企画センター第1回コロキウム（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 長田俊樹 |
| 2. 発表標題 ニコラス・エヴァンズ教授の業績とその人となり |
| 3. 学会等名 共同公開シンポジウム『島嶼地域における言語研究の可能性と課題』（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 長田俊樹 |
| 2. 発表標題 なぜ日本語系統論は流行らなくなったのか |
| 3. 学会等名 国立国語研究所第104回コロキウム（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Osada Toshiki, Madhu Purti and Nathan Badenoch |
| 2. 発表標題 Dictionary of Mundari Expressives |
| 3. 学会等名 the 40th International Conference of the Linguistic Society of India (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 小林正人 |
| 2. 発表標題 Panini's definition of the bahuvruhi as sesa 'remainder' |
| 3. 学会等名 第17回世界サンスクリット会議 (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計6件

| | |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 長田俊樹、Madhu Purti | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 | 5. 総ページ数 173 |
| 3. 書名 夏季言語研修ムンダ語教本 | |

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 長田俊樹、ネイサン・バデノック編 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 | 5. 総ページ数 298 |
| 3. 書名 ムンダ語擬音語擬態語辞典 | |

| | |
|-------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 長田俊樹編 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 三省堂 | 5. 総ページ数 350 |
| 3. 書名 日本語「起源」論の歴史と展望 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Kobayashi Masato, Anjani Kumari, Tetrura Oraon | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 Manas Prakashan Bendora | 5. 総ページ数 159 |
| 3. 書名 Khatrka Ropnas hi Tungul | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Kobayashi Masato, Anjani Kumari, Tetrura Oraon | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 Manas Prakashan Bendora | 5. 総ページ数 69 |
| 3. 書名 Sawa Rupiya hi Khatri | |

| | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 著者名 長田 俊樹 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 ひつじ書房 | 5. 総ページ数 320 |
| 3. 書名 上田万年再考 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|--|---|---------------|
| 研究 分担者 | 小林 正人 (Kobayashi Masato) (90337410) | 東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授 (12601) | |
| 研究 分担者 | B a d e n o c h N a t h a n (Nathan Badenoch) (50599884) | 京都大学・国際戦略本部・特定准教授 (14301) | 削除：2018年12月6日 |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|---------------------------------|---------------------------------------|--------------------------------|--|
| インド | Central University of Jharkhand | Central Institute of Indian Languages | Ranchi University | |
| インド | Ranchi University | Central University of Jharkhand | Indian Institute of Technology | |